社 会 科

１　育成したい「思考力」

社会的事象について，事象が内包する事実を既有経験を基に比較・類別して特色を捉えたり，その特色から問いをつくり，時間的・空間的視野や立場の広がりの中で事象相互を関係づけ，その意味や価値を捉えたり，その意味や価値を基に社会の全体像を再構成したりする力

社会科では，現実社会を理解し，公民的資質の基礎を養うことをねらっている。よって，授業を窓に，社会の姿が分かる授業づくりが求められる。そのためには，一つ一つの社会的事象の目に見える部分を知るだけでなく，事象の意味や価値という見えない部分を理解し，社会の姿を総合的に判断し，子ども自身が社会への解釈を描き直す必要がある。この過程で働くのが上記「思考力」である。

（１）比較・類別し，特色を捉える力

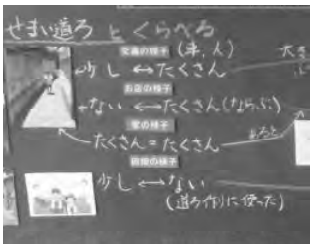
「比較・類別し，特色を捉える」とは，対象となる事象が何で，他とどこが同じで何が異なるのか，といった事象そのものを捉えることである。具体的には，事象の目に見える部分を丹念に調べ，事象を構成する事実や関連する事実を比べたり，仲間分けしたりすることを通して，一つの，又は複数の事象の特色を明らかにすることを指す。その際には，一つ一つの事実が子どもの経験と結びついた状態で理解されていることに留意する必要がある。以下に実践例を紹介する。

第３学年「めぐって　見えた　学校のまわり」

【本単元で育成したい「思考力」】

住宅や店の広がり，公共施設の位置，道路の様子等を手がかりに，探検したコースを比較・類別して，学校の周りの特色を捉える力

まず，家や店の位置，人や車の様子を手がかりに，学校の南側と西側を比べた。それによって，子どもたちは学校の西側にある広い道路の辺りには大きな車が通ることが多いが，学校の南側にある狭い道路の辺りには自転車が通ることが多いという差異点や，家が多いという共通点を見いだした。そして，その後探検した学校の東側・北側についても上記の手がかりで仲間分けをすることで，学校の周りの様子を狭い道の周りは家が多く，広い道の辺りはお店が多いとまとめていった。これが比較・類別し，学校の周りの特色を捉える力である。



【共通点や差異点を探す】

（２）時間的・空間的視野や立場の広がりの中で事象相互を関係づけ，その意味や価値を捉える力

「時間的・空間的視野や立場の広がりの中で事象相互を関係づける」とは，その関係する事象を時間的・空間的視野や立場を広げて，事象の相互関係を「目的と手段」「原因と結果」等と見いだしていくことである。「その意味や価値を捉える」とは，こうした事象の機能，成因，影響等を明らかにすることである。

○　「時間的」「空間的」な視野の広がりの中に存在するさまざまな事象と関係づける

追究対象である事象が存在する「時」から過去や未来へと視野を広げたり，その事象が存在する「位置」から範囲を広げたりしていく中に存在するさまざまな事象との関係を考える。以下に実践例を紹介する。

第５学年「これからの食料生産　－瀬戸内鰆の資源管理－」

【本単元で育成したい「思考力」】

激減した瀬戸内鰆の資源回復について，時間的・空間的視野や立場を広げ，資源を回復させてきた取り組みを予想し，資料から長期的展望に立った広域的な協力体制によって「みんなで育て，あとでとる」取り組みが，鰆資源を増やしたことを捉える力

瀬戸内鰆の激減という課題について，今すぐは難しくとも，未来に解決するために何かできるのではないかと考えた。「鰆の漁獲量の推移」と「鰆を増やす取り組み年表」をつなぎ，鰆資源が回復してきたことと，鰆の稚魚を放流し，秋漁を自粛したこととを関係づけた。これが，時間を広げて事象相互を関係づけるということである。

また，香川県内の取り組みだけでは難しいが，広域の協力体制によって可能ではないか，と考えた。「鰆の回遊範囲」と「鰆を放流している所」の地図資料をつなぎ，鰆資源が回復してきたことと，県の取り組みが瀬戸内海沿岸11府県に広がり，協力して鰆の稚魚を放流してきたこととを関係づけた。これが，空間を広げて事象相互を関係づけるということである。

これらのようにして，瀬戸内海の鰆を増やすためには，瀬戸内海沿岸の11府県が，協力して，未来のために今をがまんしなければいけないと捉えるのが，時間的・空間的視野の広がりの中で事象相互を関係づけ，その意味を捉える力である。

○　「立場」の広がりの中に存在するさまざまな事象と関係づける

追究する社会的事象を，例えば「官から民」「消費者から生産者」等と立場を広げていく中で存在する事象との関係を考える。以下に実践例を紹介する。

第４学年「南海トラフ地震から，わたしたちのくらしを守る人々」

【本単元で育成したい「思考力」】

家族，公的機関，地域の人々それぞれの取り組みを調べ，それらを相互に関係づけ，防災の意味を捉える力

子どもたちは，自地域の防災・減災の力を高めるために，まず，地震により公的機関が来られなかったにもかかわらず，多くの命が助かった地域を事例として，その理由を探った。その際，家族や公的機関，地域の人々へと立場を広げて，「地震による人的被害の数」と，資料から調べた村役場や自治会，各家庭のそれぞれでしていた被害を防いだり減らしたりする工夫をつなぎ，白馬村での死者がいなかったということとジャッキの準備，ハザードマップの作成，安否確認システムの作成等の取り組みをしていたことを関係づけた。それが，立場を広げて事象相互を関係づけるということである。このようにして，自分や家族だけでなく公共機関や地域とも協力し合うことが大切だと捉えていくのが，立場の広がりの中で事象相互を関係づけ，その意味を捉える力である。

（３）社会の全体像を再構成する力

「社会の全体像を再構成する」とは，子どもが既習事項や生活経験から得た断片的な情報を基に解釈していた社会の全体像を，教材からの学びや友達との学び合いの中でその解釈を磨き合い，修正したり，より妥当性の高いものに組み替えたりして描き直すことである。以下に実践例を紹介する。

第６学年「安住の地を求めて　－難民問題を通して見える世界と日本の役割－」

【本単元で育成したい「思考力」】

難民に関するさまざまな活動を調べ，時間的・空間的視野や立場を広げながら難民発生の経緯や避難生活の様子等を関係づけ，その活動の意味や影響，関係する人々の思いを捉え，世界平和についての解釈を再構成する力

平和な状態を当たり前と捉えている子どもたちが，現在の世界情勢を正しく理解するため，国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)を中心に，難民を救う活動について調べていった。UNHCRと連携し支援を行う民間企業とそれを待つ難民の様子を関係づけ，難民生活の変化や苦難を顧みずに働く人々の「命を救いたい。」「安心してほしい。」という思いや願いを捉えていった。難民のおかれた状態とそれを解決しようとする人々の営みから，世界の人々が共につながっていることを捉え，世界平和は各国や諸機関が個々に支援することで保たれるだけではなく，それぞれが役割を果たし協力していかなければ実現しないものであると，解釈をより妥当性の高いものへと描き直していった。これが再構成する力である。

【思いや願いにせまる話し合い】